

41360

教科書文庫

4
810
31-1918
<del>20000</del> 25634

T7 1918  
200030  
2783

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

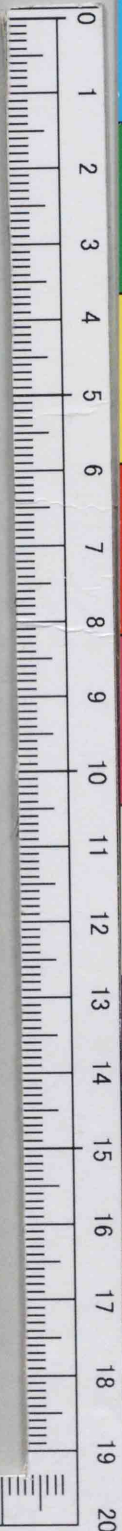


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



375.9  
Mo14  
資料室

尋常  
小學

國語讀本

卷三

文部省



資料室

275.9  
M016



尋常  
小學

國語讀本

卷三

文部省

モクロク

一	イマハ	一	十四	うらしま太郎	三十九
二	ハヤオキ	二	十五	四方	四十六
三	ヒヨコ	五	十六	私ノ村	四十八
四	うちの子ね	十	十七	一口はなし	五十一
五	お花	十二	十八	をののたうふう	五十四
六	ゆびの	十四	十九	セミ	五十七
七	かんがへもの	十七	二十	ささ舟	六十
八	わらびとり	二十	二十一	水デツ分	六十五
九	竹の子	二十五	二十二	虫ぼし	七十
十	きやうだい	二十八	二十三	カウモリ	七十三
十一	五一ちいさん	三十一	二十四	十五や	七十七
十二	右ト左	三十五	二十五	ふじの山	八十
十三	まはりつこ	三十七	二十六	はごろも	八十二

唐島大學圖書印

唐島大學  
25634  
圖書

唐島大學圖書印

さくら  
イマハ サクラ ヤナ  
タネノ 花ザカリ デス  
テフテフ ハ 花カラ 花  
はち  
へ ヒラヒラト マヒ、ハチ  
ハ セツセト ミツヲア  
ツメテ 井マス。  
ミチバタ ニハ スミレヤ



イマハ

ひばり

タン。ホ。ポ。ガ。サイテ。キル。シ。ムギ島ノ  
上。ニハ。アサ。ハヤク。カラ。ヒバリガ。サ  
ヘツツテ。キマス。

カゼ。モ。アタタカ。デ。オモテ。デ。アソブ  
ニハ。一バン。ヨイ。トキ。デス。

ニ ハヤオキ

こうば

コウバノ。キテキ。ガ。ナツテ。キマス。マ  
ダ。ウスグラウ。ゴザイマス。ガ。ケサ。コソ

からす

ニイサン。ヨリ。サキ。ニ。オキテ。ミヨウト  
オモツテ。ソツト。ネドコ。ヲ。出マシタ。

ト。ヲ。アケル。ト。ムカフ。ノ。ソラガ。ウ

スアカク。ナツテ。キマス。カラス。ガ。二三

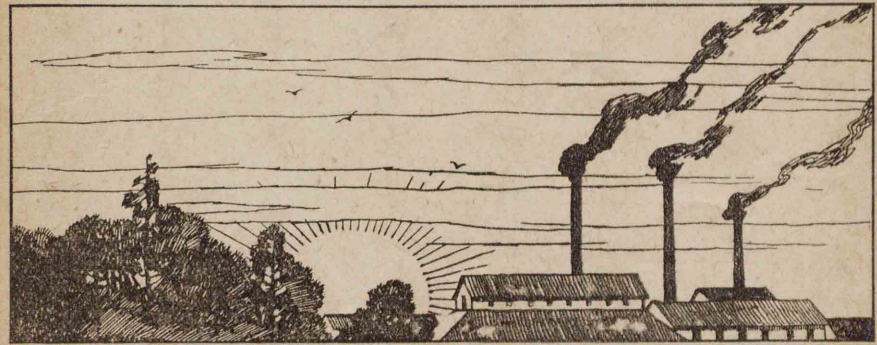
バ。ナキ。ナガラ。トンデ。イキマス。

ア。日。ガ。出。ハジメタ。キレイダ。ニイ

サン。ニイサン。

オウイ。ト。キドバタ。デ。ニイサンノ。コエ

えんとつ



ガ シマス。  
又 一シキリ キテキ ガ ナツ  
テ、 エントツ カラ ムクムクト  
マツクロナ ケムリ ガ 出マス。  
コウバ デハ モウ シゴトガ  
ハジマツテ キル ラシイ。  
ハヤク カホ ヲ アラツテ、 ニ  
イサン ト 一シヨニ オサラヒ

ヲ シマセウ。

三 ヒヨコ

たまご  
ニ三日 マヘ カラ メンドリ ガス ニツ  
キマシタ。 ケサ オカアサンガ タマゴヲ  
入レテ オヤリ ニ ナリマシタ。 メンドリハ  
ヘンナ コエ ヲ タテテ キマシタガ、 見  
テ キル ウチ ニ、 タマゴ ヲ ハラノ下  
ニ ダイテ シマヒマシタ。

エ ヤ水ヲ ヤツテモ、見ムキモシ  
ナイデ、タマゴヲ アタタメテ 舐マス。  
オカアサン ニ

ひよこ

「イツ ヒヨコ ガ 出マス」カ。

ト キキマス ト、

二十日

「二十日 バカリ タツ ト 出マス」

ト オツシヤイマシタ。

アル アサ、オカアサン ガ

おやどり

「ヒヨコ ガ カヘツタ」

ト オツシヤツタ ノデ、見

ニ イキマス ト、オヤドリ

ノ ムネ ノ トコロ カラ、

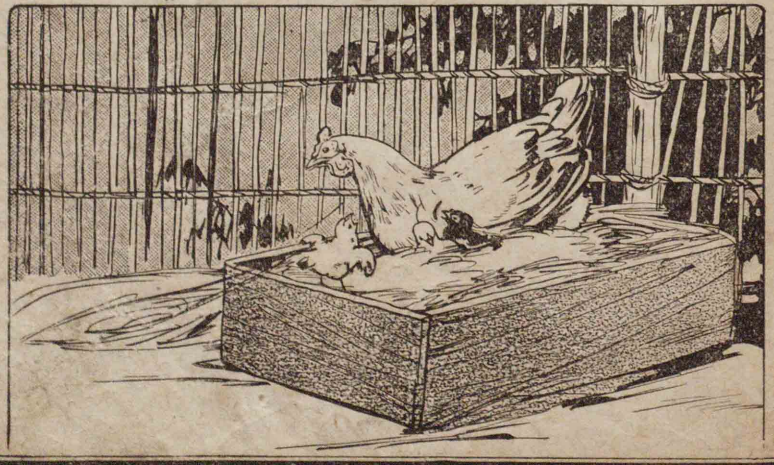
ヒヨコ ガ 小サナ アタマ

ヲ 出シテ、ピヨピヨトナ

はね

イテ 舐マシタ。ハネノ下

ニモ ニ三バ 舐ル ヤウ デシタ。



ヒヨコ ガ ナク ト、 オヤドリ ハ オハナ  
シ デモ スル ヤウ ニ、 ココココ ト イ  
ツテ キマシタ。

には

ニ三日 タツ ト、 オヤドリ ハ ヒヨコ ヲ  
ニハ ヘ ツレ出シマシタ。 ヒヨコ ハ ミン  
ナ デ 十パ デス。

あし

ヒヨコ ハ ホソイ アシ デ、 チヨコチヨコ  
アルキマス。 タベモノ デモ サガス ノ デ

なのは

セウ、 キイロイ クチバシ デ、 トキドキ チ  
メン ヲ ツツキマス。

ナノハ ヤ コ米 ヲ ヤル ト、 ヒヨコ  
ハ ミンナ ヲツテ キテ タベマス。 オヤド  
リ ハ ナンニ モ タベナイデ、 コココ  
ト イヒ ナガラ、 ソノ ヘン ヲ 見マハリ  
マス。

そば

ネコ デモ ソバ ヘ クル ト、 オヤドリ ハ

け

オコツテケヲサカダテマス。  
私ハガクカウカラカヘツテ、ヒヨコヲ  
見ルノガタノシミデス。

四 うちの子ねこ

うちの子ねこは

かはい子ねこ、

くびのこすずを

ちりちりならし、

をい

るも

すそにからまり、

たもとにすがる。

うちの子ねこは

かはい子ねこ、

くびのこすずを

ちりちりならし、

まりとざれては

えんからおちる。

てれ





五 お花

へ  
お花 は がくかう から かへると、おつ  
かひ に いたり、には を はいたり し  
て、おかあさんの おてつだひ を します。  
あかちゃん が なき出すと、すぐ そばへ  
よつて、

ねんねん ころりよ、

おころりよ。

せ

ゑ

ばうやはよい子だ、

ねんねしな。

と かはいらしい こゑで、子もりうた を  
うたひます。それ でも まだ あかちゃんが  
なく とき には、  
「おかあさん、あかちゃん  
におちち を のま  
せて ちやうだい。」



かういつて、だつこをして おかあさん  
の ところへ つれて いきます。

お花は ことし 九つ です。

六 ゆび の な

ゆふはん が すんだ あと で、おぢいさん  
が 二郎 に たづねました。

ふゆ ニ 二 へ

「おまへ は て の ゆび の な を し  
つて るます か。」

ほ

「いつて るます。一ばん ふとい の が お  
やゆび で、一ばん ほそい の が こゆ  
び です。」

「それ から。」

「それ から、一ばん ながい の が 中ゆ  
び で、中ゆび と おやゆび の あひだ  
にある の が 人さしゆび、中ゆび と  
こゆび の あひだ にある の が く

すりゆびです。」

「さうです。それではあしのゆびのなをしつてゐますか。」

「おなじことでせう。」

「まあ、いつてごらん。」

「おやゆび、人さしゆび。」

おぢいさんはわらひながら、

「二郎、おまへはそのゆびで人を

わ

さしますか。あしのゆびは、おやゆびとこゆびのほかにはながないのです。」

とをしへてやりました。

七 かんがへもの

「このはこの中に、おもしろい人がゐます。あててごらんなさい。」  
「そのはこをかしてください。」

「はい。」

「ふつても よう ございますか。」

「はい。」

「たいそう かるう ございますね。この人は

どんな いろの きものを きて ゐますか。」

「あかい きものを きて ゐます。」

「それでは をんな でせう。」

「いいえ。」

「それでは をとこの子 ですか。」

「いいえ。としより です。」

「どうも こまりました。どんな かほ をし

て ゐますか。」

「かほちゆう ひげだらけ です。」

「それでは ても あしも ない でせう。」

「はい。」

「わかりました。だるま さん です。」

八 わらびとり

小 二郎は正一とうらの山へわ  
 らびをとりに行きました。よけいに  
 とつたはうがかちだといつて、二  
 人はまつやつつじのあひだをあ  
 ちらこちらへくぐつてとりました。太  
 くてやはらかなわらびがたくさんは  
 えてゐました。

む 上



二人がむちゆうになつ  
 てとつてゐますと、下  
 のはうからかさかさい  
 はせてかけ上つてくるも  
 のがあります。

二人がびつくりして見  
 てゐますと、それ  
 は小二郎のうち

ぬ  
の いぬ でした。犬は はな を くんくん  
いはせ、を を やたらに ふつて、小二郎  
の そば へ よつて きました。それ から  
その へん を むやみに かけまはりました。  
た。  
又 とりはじめて、二人 は たくきん とつ  
て から くらべて みました。どちら も た  
いてい おなじ くらゐ で、かちまけは あ  
め み

りません でした。  
その とき 正一 の おぢいさんが、たき  
ぎを うま に つけて そこ へ きまし  
た。二人 は よろこんで、おぢいさんにつ  
いて かへりました。  
小二郎 が うち へ かへつて みますと、  
犬は もう とつくに かへつて ゐて、か  
けて きて とびつきました。

あ	い	う	え	お
か	き	く	け	こ
さ	し	す	せ	そ
た	ち	つ	て	と
な	に	ぬ	ね	の
は	ひ	ふ	へ	ほ
ま	み	む	め	も
や	い	ゆ	え	よ

が	ぎ	ぐ	げ	ご
ざ	じ	ず	ぜ	ぞ
だ	ぢ	づ	で	ど
ば	び	ぶ	べ	ぼ
ぱ	ぴ	ぷ	ぺ	ぽ

雨

ら	り	る	れ	ろ
わ	ゐ	う	ゑ	を
ん				

九 竹の子

この二三日の雨で、竹の子がこんに  
 なに 出ました。むぐらもちでもとほつた  
 やうに、土がところどころもち上つて  
 ります。そこから竹の子が出るの

です。

高  
この あひだ かきねの そばへ 出たの  
は、 もう 私 の せい より 高く なりま  
した。 かう のびて は とても たべられま  
せん。

石  
石がき の 下へ 出た の は、 かは が  
おちはじめて、 竹 に なりかかつて るます。  
あれ は いまに さを竹 に ても なる の

方

でせう。  
又 あそこ ここに わらを むすびつけ  
て ある の は、 ほり  
とらない しるしで、 の  
ばして おや竹 に す  
るの だ さう  
です。 むかふの  
方に、 二本 な





らんで むる ほそい 竹の子は、いまに 竹  
に なつたら、おぢいさん に、あれで 竹  
うま を こしらへて いただく つもり  
です。

十 ぎやうだい

ゆふべ の 雨で くさ や 木 の  
みどり いろ ます なつ の あさ、  
つつみ かかへて がくかうへ

足

つれだち いそぐ あね おとと。

足 すべらせて こけかかる

おとと を かばふ あね の うで。

かばふ はずみに あね は また

足だ の はなを ふつつりと。

「ねえさん これをあげます。」と、

こしにはさんだ手ぬぐひの  
はしひきさいてさし出せば、  
「正さんこれはありがたう。」

あねは手ばやくををたてて、  
小川の水で手をあらひ、  
「さ、いきませう。」ときやうだい  
はがくかうさしていそぎゆく。

十一 五一ぢいさん

村はづれに水車やがあります。村の  
人は五一車とよんでゐます。五一ぢ  
いさんがその水車やのばんをして  
ゐるからです。

五一ぢいさんはおもしろいぢいさんで  
す。「からすのなかない日はあつて  
も、五一ぢいさんがうたはない日はな

い。と村の人からいはれるほど、い  
つもきげんよくうたをうたふちい  
さんです。

長

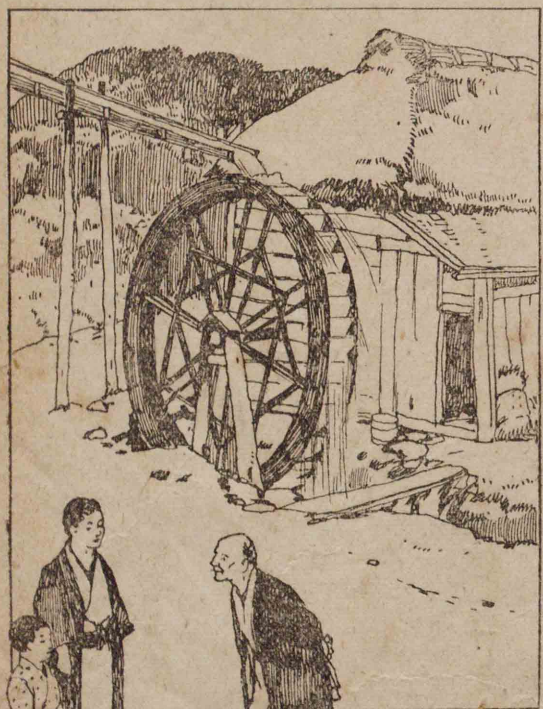
長いはんてんをきて、みじかいももひ  
きをはいて、こぬかだらけになつては  
たらくちいさんです。

ざぶざぶおちる水のおと、とんとん  
ひびくきねのおと、そのにぎやかな

中から、

「しごとなされよ、

きりきりしやんと、



かけたたすきの

きれるほど。

五いちいさ

んのう

たふこゑ

道

が きこえます。

いつか うちの おとうさんが 道で、

「いつも おたつしやなこと」で。

とおつしやつたら、五一ぢいさんは

「もう すつかり よわりまして。」

と いつて、大きな 手で あたまを な

でました。

五一ぢいさんは ことし 六十九 だ さう

です。

十二 右 ト 左

ゴハン ヲ タベル トキ ニ、ハシ ヲ モ

ツ方ノ 手ハ 右 デ、チヤワン ヲ モ

ツ方ノ 手ハ 左 デス。

足ニモ 右左ガ アリ、目ニモ 耳ニ

モ 右左ガ アリマス。キノ ノ ソデニ

モ、タビニモ、手ブクロニモ、ソツニモ

持

右左 ガ アリマス。  
 タイサウ ノ トキ アルキ出ス ノ ハ 左  
 ノ 足 デ、 オケイコ  
 ノ トキ アゲル ノ  
 ハ 右ノ 手 デス。  
 又 オモイ モノ ヲ  
 右ノ 手 ニ 持ツ トキ ニハ、 カラダ ヲ  
 左ノ 方 へ マゲ、 左ノ 手 ニ オモ

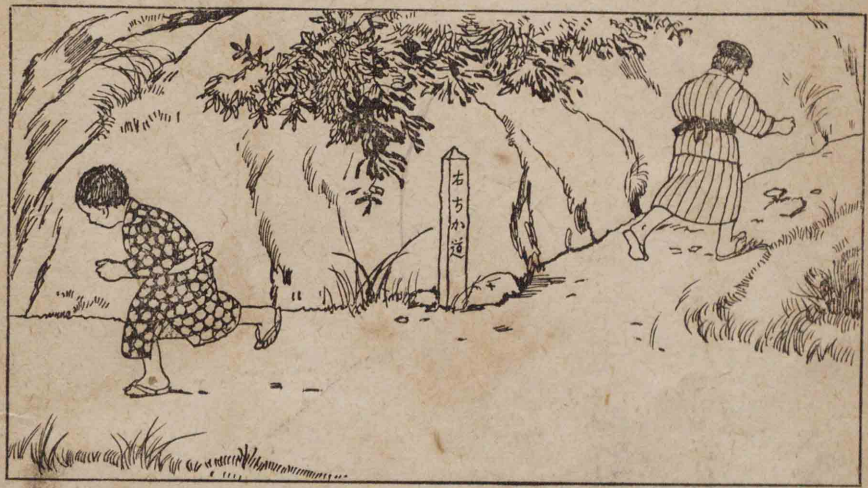


通

イモノ ヲ 持ツ トキ ニハ、 カラダ ヲ  
 右ノ 方 へ マゲマス。  
 ソレ カラ、 道 ヲ アルク トキ ニハ、 左  
 ガ ハ ヲ 通ル ノ ガ ヨイコト ニ ナツテ  
 申マス。

十三 まはりつこ

小三郎 又 わかれ道の ところ へ きました。  
 まはりつこ を して みませう か。



正一「して みませう。ぼくは右のちか道の方をいつてみます。」

小二郎「それではぼくは左の本道を通ります。」

二人はかけ足でま

はりつこをしました。ちか道の方は、道がこはれてゐたり、石が出てゐたりしました。それでとほい本道をまはつた小二郎の方が正一よりもかへつてさきにつきました。

十四 うらしま太郎

むかしうらしま太郎といふ人がありました。

海

ある日、はまを通ると、子どもが大ぜい、でかめをつかまへて、おもちゃにしてゐます。うらしまは、かはいさうにおもつて、子どもからそのかめをかつて、海へはなしてやりま



舟

した。

それから二三日たつて、うらしまが舟につて、つりをしてゐますと、大きなかめが出てきて、

「うらしまさん、このあひだはありがとうございました。そのおれいに、りゅうぐうへつれて、いつて上げませう。私のせ中へおのりなさい。」



毎

といひました。うらしまがよ  
ろこんでかめにのるとか  
めはだんだん海の中へ  
はいつていつてまもなくりゆ  
うぐうへつきました。

りゆうぐうのおとひめはう  
らしまのきたのをよる  
こんで毎日いろいろなごち



そうをしたり、さまさま  
なあそびをして見せ  
たりしました。

うらしまはおも  
しろがつて、うち  
へかへるのも  
わすれてゐまし  
たが、そのう



箱玉

ちにかへりたくなつて、おとひめに  
 「いろいろおせわになりました。あまり  
 長くなりませんから、もうおいとまに  
 いたしませう。」  
 といひました。おとひめは  
 「それはまことにおなごりをしいこと  
 でございます。それではこの玉手箱  
 を上げます。どんなことがあつても、

母父

ふたをおあけなさいませうな。  
 といつて、きれいな箱をわたしました。  
 うらしまは玉手箱をもらつて、又か  
 めのせ中につて、海の上へ出  
 てきました。  
 うちへかへつてみると、おどろきました。  
 父も母もしんでしまつて、うちもな  
 くなつてゐて、村のやうすもすつかり

かはつてゐます。しつてゐるものは一人もありません。かなしくてかなしくてたまりませんから、おとひめのいつたこともわすれて、玉手箱をあけました。あけると、箱の中から白いけむりがぱつと出て、うらしまはたちまち白がのおぢいさんになつてしまひました。

十五 四方

東 西 南 北



トイヒマス。

日ノ出ル方ガ東デ、日ノハイル方ガ西デス。東へムイテリヤウ手ヲヒロゲルト、右ノ手ノ方ガ南デ、左ノ手ノ方ガ北デス。東西南北ヲ四方

學校

十六私ノ村

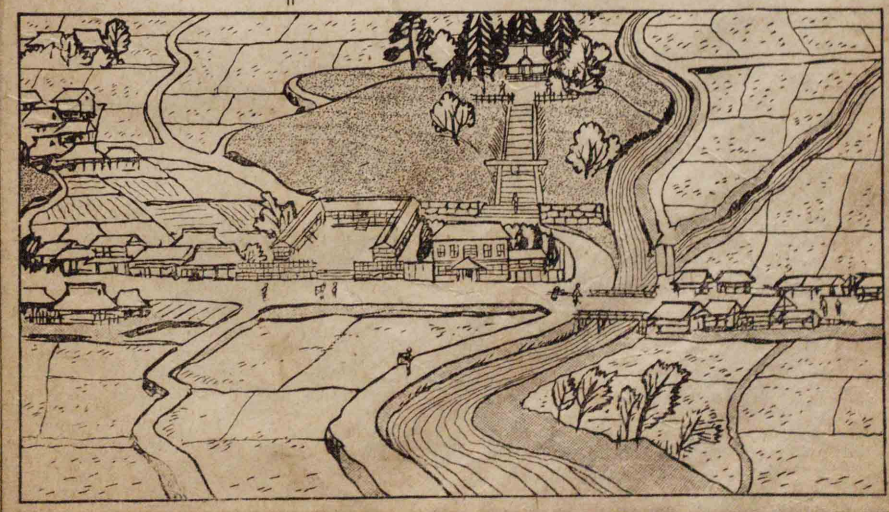
學校ノ北ニ小高イヲカガアリマ  
 ス。ヲカノ上ニ天ジンサマノオ  
 ミヤガアリマス。ソコへ上ルト、私  
 ノ村ハ一目ニ見エマス。  
 村ノ中デ、一バン目ダツノハ私  
 ドモノ學校デス。大キナ家が三ム  
 ネ、<sup>「</sup>コノ字ナリニタツテ、<sup>」</sup>井マス。學校

字家

新 | 新

ノ東ドナリニニカイヅクリノヤクバ  
 ガアリマス。  
 ヤクバノヨコデ、川ガニツオチア  
 ツテ、マガリクネツテ、南ノ方へナ  
 ガレテイキマス。  
 キヨネンデキ上ツタ新道ハ、村ヲ東  
 カラ西へ、マツスグニツキヌイテ、井マ  
 ス。新道ノリヤウガハニハ、新シイ家

今  
 ガ七ハケン デキマシタ。  
 ソノ中ニハ、ニウリヤ  
 モアリマス。今ソノ  
 ミセノマヘニニ車  
 ガトマリマシタ。車ヲ  
 ヒイテキタ人がベ  
 ンタウデモタベルノ  
 デセウ。



青  
 ツイコノアヒダウエタ田ガモウア  
 ンナニ青クナリマシタ。  
 ドコカヨカノ下デ、ニハトリガナ  
 キマス。モウオヒルニナツタノデセ  
 ウ。オ寺ノカネモナリ出シマシタ。  
 十七 一口ばなし  
 一 雨のあな  
 星  
 子どもがそら一めんの星を見て、

光 何

「ああ わかつた。あの 光る ところが 雨  
の ふる あな だ。」

二 星 とり

「おい、長い さを を ふりまはして、何 を  
してゐる の だ。」

星 を 二 つ 三  
つ は た き お と き  
う と して ゐ



兄 弟

る の だ。」

「ばかな こと を いふ。そんな ところ で  
とどく もの か。やね へ 上つて は た け。」

三 星 の か ず

ある ば ん、弟 が には へ 出 て、「一 つ  
二 つ と か ぞ へ て ゐ ま し た。兄 が

「おまへ、何 を か ぞ へ て ゐ る の だ。」  
と た づ ね ま す と、

弟<sup>「</sup>星<sup>」</sup>をかぞへてゐます。

兄<sup>「</sup>こんなくらいばんにかぞへない<sup>」</sup>  
で、ひるかぞへるがよい。

十八 をのの たうふう

むかしをのの たうふうといふ人が  
ありました。わかいとき字をならひま  
した。が、うまく書けませんので、こまつ  
てゐました。

書

池

あるとき、雨のふる日に、たうふう  
がにはへ出て、池のはたを通り  
ますと、しだれやなぎのえだへかへる  
がとびつかうとしてゐます。

虫

かへるはやなぎのつゆを虫とで  
もおもつたのでせう、とんではおち、  
とんではおち、何べんも何べんもと  
びつかうとします。だんだん高くとべ

る やうになつて、とうとう やなぎに  
とびつきまし

た。たうふう

はこれを

見て、この

かへるのや

うに、こんきがよければ、何ごともで

きない ことはないと さとりました。



名

それからは一しやうけんめいになつて、  
毎日字をならひました。ずんずん手が  
上つて、のちには名高い書手となり  
ました。

十九 セミ

前

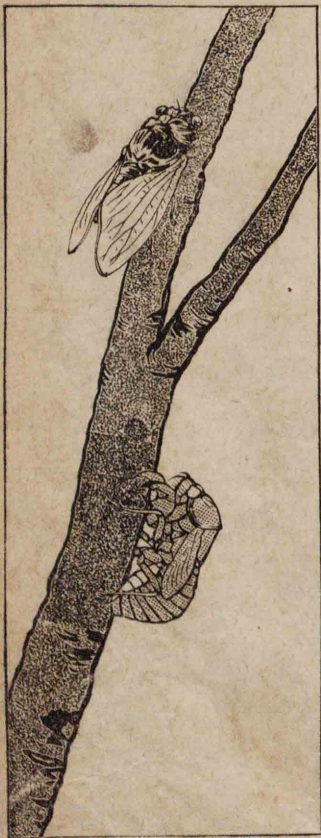
ニハノモモノ木ノネモトカラ、カ  
ラヲキタセミガハヒ上ツテキマス。  
チヤウド私ノ目ノ前デトマツテ、

色

來

カラ ヲ ヌギハジメマシタ。  
 マモナク ヌイデ シマヒマシタ。 アブラゼミ  
 デス。 色 ガ ウスクテ、 ヌレテ 茸ル ヤウ  
 ニ 見エマス。 見テ 茸ル ウチ ニ、 チヂン  
 デ 茸タ ハネ モ ダンダン ノビテ、 色 モ  
 シダイニ コク ナツテ キマシタ。  
 スコシ タツテ カラ 又 來テ 見マス ト、  
 モウ リツパニ セミ ニ ナツテ 茸マス。

行



コノ 大キナ モノ ガ、 ヨク アノ カラ ノ  
 中 ニ ハイツテ 茸タ モノ ダ ト オモ  
 ヒマシタ。  
 ツカマヘヨウ ト シテ 手 ヲ 出シマス ト、  
 「ジイツ ト ナイテ、 トンデ 行キマシタ。」

今ニハノ  
 木ニセミ  
 ガウルサイ



ホド ナイテ 舁マス。アノ セミ モ コノ  
中ニ 舁ルノ デセウ。

二十 さき舟

風  
日の 光が やはらかに さして、小川の  
水は きれいに すきとほつて ゐます。風  
が しづかに ふいて 来て、きしの さき  
が さらにさらとおとを たてて ゐます。

三郎 今日

二郎「三郎 さん、又 今日 も 舟を なが

して あそびませう。」

三郎「又 はしりくらを させませう。五郎

さん も なかまに おはいり なさい。」

みよ子「私 は かちまけを 見る 人にな  
りませう。」

男の子 三人 は さきの はを とつて、  
舟を こしらへました。

みよ子 は さきの 小えだを 手にも

男 人

つて、土ばしの上にな  
ちました。

みよ子「さあ、私がこゑを

かけましたら、みなさん一

しよに舟を出すの

ですよ。一、二、三。」

三人は一しよに舟を

出しました。舟は風に



ゆられながら、土ばしの  
方へながれて行きます。  
三人は舟とならんで、  
川のふちを掛けて行  
きます。草のはにと  
まつてゐたてふてふが  
おどろいてとびたちまし  
た。



みよ子「あら、てふてふが五郎さんの舟に ともりました。」

近 舟は だんだん 土ばしへ 近く なりま  
す。

五郎「ほうら、もう ちぎ しようぶだ。」

みよ子は きつと ささの 小えだを 上げ、

「ばんがち、五郎さんの 舟。」

二郎「五郎さん ばんざい。」

三郎「五郎さん ばんざい。」

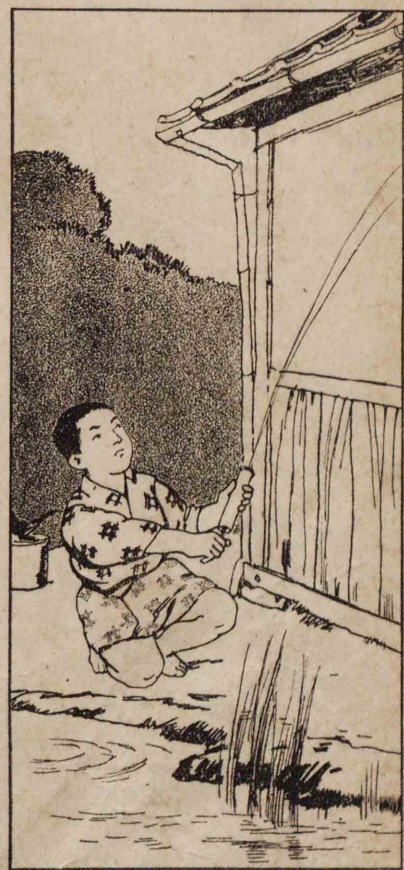
みよ子「五郎さんの 舟には、てふてふの  
せんどうさんが のつた から、かつた  
のでせう。もう 一ど やつて ごらん  
なさい。」

二十一 水デツパウ

私ノ ウチヘ キノフ ヲケヤガ 來テ、

手ヲケ ヤ タラヒ ノ タガ ヲ カケカヘ  
 マシタ。 アト ヘ 竹 ノ キレ ヲ ノコシ  
 テ 行キマシタ が、 ソノ 中ニ フシガ  
 一ツ アツテ、 水デツパウ ニ ナリ サウナ  
 ノ ガ アリマシタ。  
 私 ハ ソレ ヲ ヒロツテ、 フシ ノ マン  
 中ニ、 キリ デ 小サナ アナ ヲ アケマ  
 シタ。 ソレ カラ ホソイ 竹 ヲ エニシ

テ、 ソノ サキニ キレ ヲ マキツケテ、  
 セン ヲ コシラヘマシタ。  
 池ノ 水 デ タメシテ ミル ト、 ウマク  
 出来テ 弁テ、 高く 上ゲル ト、 ヤネノ  
 上 マデ トドキマス。  
 ウレシクテ タマリマセン ノデ、 ニハニ 水  
 ヲ ウツタリ、 ウエホ ニ 水 ヲ カケタリ  
 シマシタ。



セン ヲヌイテ 見ル ト、キレガ トレ  
 テ 弁マシタ。又 マキナホシテ、コンド ハ  
 水デツパウ ヲ ジョウロ ノ カハリ ニ シ  
 ヨウ ト オモツテ、フシ ニ 小サナ アナ

ソノ ウチ  
 ニ 水ガ  
 出ナク ナ  
 ツタ ノデ、

ヲ タクサン アケマシタ。サウシテセン ヲ  
 ヒキマシタガ、水ガ ウマク ハイリマセ  
 ン。コマツテ ニイサン ニ 見テ モラヒマ  
 シタラ、

「コンナニ アナ ヲ タクサン アケテ ハ  
 ダメダ。ソノ ウチ ニ、ニイサンガ コ  
 シラヘテ ヤラウ。」  
 ト イフ コト デシタ。

二十二 虫ぼし

着物

黒

今日はうちの虫ぼしです。たんすや  
 つづらから着物を出して、風通しの  
 よいところにかけてあります。  
 この黒いもめんのもんつきは私の  
 です。そのとなりの五つもんのお  
 りとしまのはかまはおとうさんの  
 です。

廣

赤

そちらのはばの廣い光るおびは  
 ねえさんのので、はばのせまい黒いの  
 はおばあさんのです。おばあさんは  
 あれをしめて、よくお寺まゐりにい  
 らつしやいます。  
 それから、あの赤いじゆばんはねえ  
 さんので、ねずみ色のもんつきはお  
 かあさんのです。



こちらのかすりの  
 つつそでは太郎の  
 あはせで、そのとな  
 りのめりんすのあ  
 はせは私のです。  
 私どもはあれを  
 着て、をばさんの村  
 のお祭によばれて

祭

行くのです。

二十三 カウモリ

鳥

ムカシ鳥トケダモノガケンクワヲ  
 シタコトガアリマス。ソノトキカウ  
 モリハ  
 私ハ鳥デモケダモノデモナイ  
 カラ。  
 トイツテ、ドチラヘモツキマセンデ

中

シタ。

ソノ 中ニ ケダモノ ガ カチ サウニ  
ナツタ ノデ、

「私ハカラダガネズミニニテ 井  
ルカラ、ケダモノ」ダ。

ト イツテ、ケダモノノミカタニナリ  
マシタ。

スコシタツテ、コンドハ鳥ガカチサ

羽

ウニナリマシタ。スルトカウモリハ

「私ハ羽ガアルカラ、鳥」ダ。

ト イツテ、鳥ノ方ニツキマシタ。

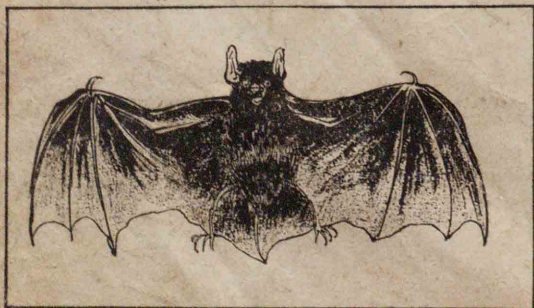
イツマデタツテモシヨウブ

ガツカナイノデ、中ナホリ

ヲシマシタ。ソノ時カウモリ

ガケダモノノ方へ行キ

マス、ト、





「オ前ハ鳥デハナイカ。」

トイツテ、ナカマヘ入レテクレマセン。

又鳥ノ方ヘ行キマス ト、

「オ前ハケダモノダラウ。」

トイツテ、アヒテニシマセン。

ソコデカウモリハシカタナシニヒ

ルハ木ノウロヤアナノ中ニ

カクレテヰテ、クラクナツテカラ空

空

ヲトビマハルヤウニナツタトイヒ  
マス。

二十四 十五や

十五やの月がさしきのまん中ま  
でさしてゐます。

夕はんがすむと、うちのものはみ  
んなえんがはへ出ました。えんがはに  
は、夕方からいもやだんごをつく

方 | タ

雲 上 吹

急 に のせて、お月さまにそなへてあ  
ります。今日私が川の土手からと  
つて来たすすきも、花いけにさして  
そなへてあります。

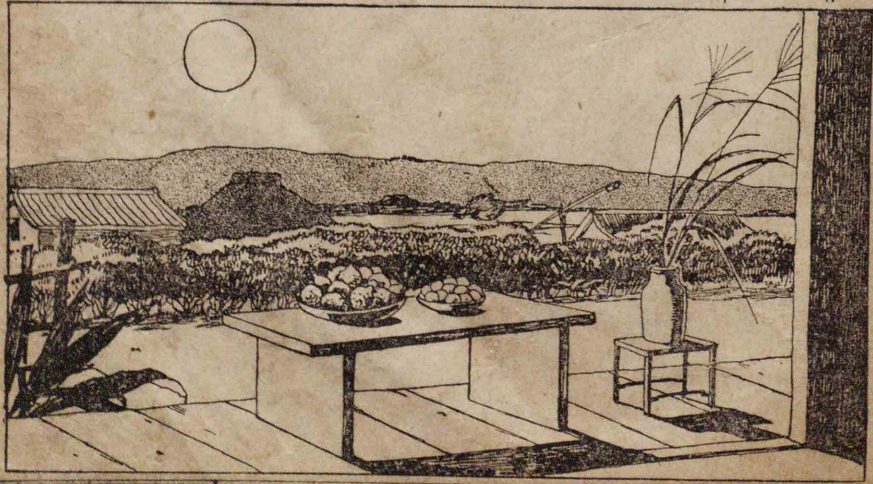
空は水のやうにすみきつて、雲一  
つありません。

だれか川上の方で、さきほどから  
ふえを吹いてゐます。

國三

來

時時すずしい風が吹  
いて来ると、おもひ出し  
たやうにくつわ虫が  
なきます。おばあさんが  
「ふみ子もこんやはき  
つとあちらでこの月  
を見てゐませう。」  
と、ひとりごとのやうに



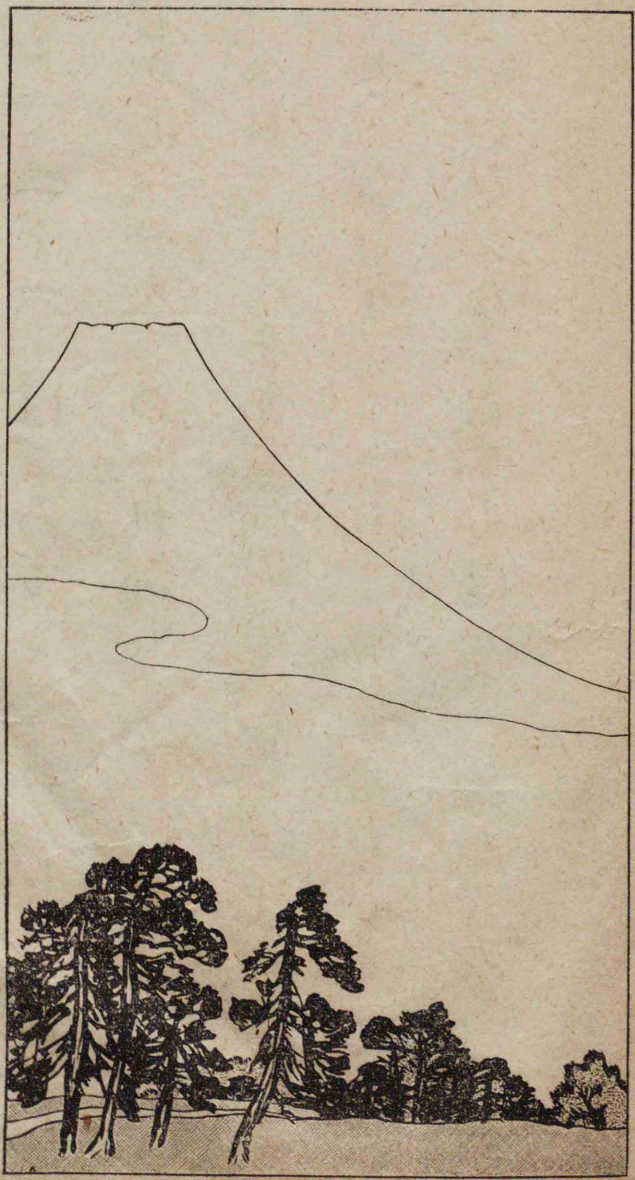
遠

おつしやいました。ねえさんは遠いとこ  
ろへおよめに行つていらつしやるの  
です。

二十五 ふじの山

あたまを雲の上に出し、  
四方の山を見おろして、  
かみなりさまを下にきく、

ふじは日本一の山。



青空 高く そびえたち、

からだにゆきの着物 着て、

かすみのすそを遠くひく、

ふじは日本一の山。

二十六はごろも

むかし一人のれふしが

「今日はまあ、何といふよいお天

きだらう。」

といひながら、みほの松原を通り

ました。

松原

日はよくてつてゐて、ふじの山は  
いつもよりなほきれいに見えました。  
風はしづかで、なみもおとをた  
てません。おきの方はかすんで、空と  
水が一つになつて見えます。  
あまりけしきがよいので、れふしが  
ぼんやりと海をながめてゐました。ど  
こからかよいにほひがして來ま

美

すので、見上げますと、松の木に美しい物が、かかつてゐました。そばへよつて見ますと、見たこともないきれいな着物でした。

「これはよい物がある。ひろつて家のたからにしよう。」

と、いつて、持つてかへらうとしますと、見たこともない美しい女が來まし

女

た。

「それは私の着物でございます。」

「いや、これは私が今ここでひろつたのです。持つてかへつて家のたからにします。」

「いや、それは天人のはごろもといふ物で、人げんにはようのないものです。」

國

「天人のはごろもなら、なほさらかへすことは出来ません。國のたからにいたします。」

「それがなくて、天へかへることが出来ません。どうぞおかへし下さいませ。」

れふしはかへしませんでした。天人はしをしをと、して、なみだにうるむ目で

申

空を見上げました。

れふしはきのどくに なりまして、

「あまりおかはいさうですから、おかへし申します。そのかはりに天人のまひと、いふものをお見せ下さいませ。」

「おかげで天へかへることが出来ます。おれいにまひをまひませう。」

上

そのはごろもを  
おかへし 下さいま

せ。

「いやいや、おかへし申

したら、まはずに空

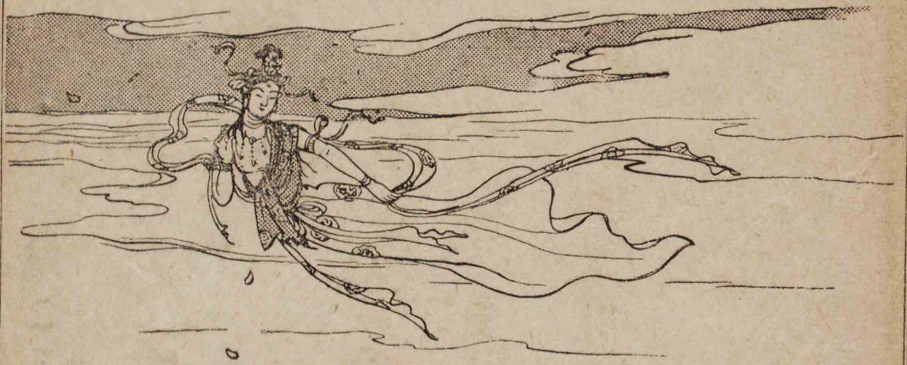
へ お上りになりま

せう。

「いや、天人はうそ



袖



を いひません。」

「ああ、はづかしいことを

申しました。」

れふしがはごろもをか

へしますと、天人はそ

れを着て、まひはじめま

した。はごろもの袖は

かるく風にまひ、はご

ろもの色は日の光にかがやき  
 ました。れふしが見とれてゐますと  
 天人はまひながら松原の上をだ  
 んだん高く上つて、ふじの山よりも  
 高い大空のかすみの中へはいつて  
 行きました。

をはり

大正六年十二月五日翻刻印刷  
 大正七年十一月五日翻刻發行

著作権所有

著作兼  
發行者

文部省

尋常小學國語讀本卷三

定價 金八錢  
 大正十二年度臨時定價 金拾四錢

翻刻發行  
兼印刷者

東京書籍株式會社

代表者

原亮一郎

印刷所

東京市小石川區指ヶ谷町百三十六番地  
 東京書籍株式會社工場

大正七年十月三日  
 文部省檢査濟

發賣所

東京市日本橋區新右衛門町十六番地  
 株式會社 國定教科書共同販賣所



福本具次